



## Launch of a surrogacy program in Uganda

### ウガンダにおける代理出産プログラムの立ちあげ

#### Interviewee

Ms. Lisa Stark Hughes

#### Q. 自己紹介をお願いします。

米国に本拠を置く GSMoms Center for Reproductive Choice と、ウガンダに本拠を置く Host Mums Uganda の経営者をしている。また、Society for Ethics in Egg Donation and Surrogacy (SEEDS)の理事でもあり、教育委員長を務めている。5 人の子供がいる。それに加えて、米国で 2 度代理出産を経験し、双子と 1 人の子供を産んだ。

#### Q. GSMoms Center for Reproductive Choice について教えてください。

GSMoms は 2010 年にスタートした。代理母になったとき、その報酬をロースクールへの進学費用にあてていた。その時、州によって異なるアメリカの代理出産法に魅了された。そして、国内の代理母を募集するアメリカの代理出産エージェントで働き始めた。契約社員として雇用されていたので、税務上、自分の代理店を設立する必要があった。これが、自分のエージェントを設立するきっかけとなった。

GSMoms は、外国人の依頼者だけを扱っている。クライアントの国籍は、中国、オーストラリア、イギリス、日本（少ない）、アメリカ、メキシコ、スペインなどさまざま。他のクライアントやエージェントから

紹介される人もいれば、依頼親のグループ経由で来る人もいる。また GSMoms のウェブサイトを見て連絡してくる人もいる。

#### Q. Society for Ethics in Egg Donation and Surrogacy (SEEDS) について教えてください。

Society for Ethics in Egg Donation and Surrogacy (SEEDS) は代理出産のエージェントのグループによって設立された。理由は、業界には既存のライセンス制度や規制機関がなかったから。SEEDS の目的は、代理出産エージェントを規制し、代理出産コミュニティ全体を向上させること。SEEDS は、このような規制は、規制のあるべき姿を実際に知っている人々（それは政治家ではない、生殖医療は政治家の専門分野ではないから）によって策定されるべきだと考えている。

SEEDS の会員には、現在 118 のエージェント、法律専門家、メンタルヘルス専門家、エスクロー会社などがある。年に 2 回の会議と毎月の教育ウェビナーを開催している。

現在までに代理出産エージェントの基準を制定し、メンバーによる投票で承認されている。また、エージェントのコンプライアンス遵守のための会員制度も導入している。コンプライアンスを遵守しているエージェントは、依頼者やドナー等からの引き合いも多く、それがエージェントのモチベーションにもなっている。

#### Q. ウガンダでの代理出産プログラムはいつから開始しましたか？どのような経緯で？どのように実施していますか。親権の取得はスムーズですか？費用はどのくらいでしょうか？

代理出産は、ウガンダの IVF クリニックで約 20 年前から行われている。クリニック



クは、代理出産を必要とする患者を支援する手段として、独自のプログラムを開始した。一般的に言って、このような状況は、依頼者にとって非常に有利になる。例えば、出生前に親権を取得することが可能で、子供が生まれた瞬間に、出生証明書に依頼親の名前が記載される。また、出生後にも30日以内であれば依頼親の名前で出生届を提出することができる。

Host Mums Ugandaは、ウガンダ政府の要請で代理出産のコンサルタントをつとめたことから始まった。ウガンダでは、どの地区にも2人の政治家がいて、そのうち1人は女性でなければならない。彼女たちの仕事は、女性問題を推進すること。これらの女性政治家の中には、代理出産を希望し、その後、現地の代理出産プログラムで子供を得た人もいる。このようなプログラムをウガンダでどのように発展させ、良いものにするかを研究するために、IVFクリニックはウガンダの政治家たちにインドへの渡航を勧め、政治家たちはインドのプログラムについて学んだ。インドのモデルには、代理母の保護がないなど、好ましくない面もあった。

約3年後、ウガンダの政治家らから連絡が来て、州によって異なるアメリカのプログラムについて情報が欲しいと言ってきた。ある時、先方は、代理出産を促進するための理想的な状況をリストアップしてほしいと頼んできたので、それを提供した。ウガンダ政府はそのリストを見て、それを実現することを決めた。そして、2020年11月に、ウガンダに来て欲しい、代理出産のプログラムの立ち上げを手伝ってほしいと頼んできた。政治家、保健省、医師、弁護士会、助産師会、各種保険会社、税務署の代表者、宗教指導者などに会った。そして、提言をまとめ、代理出産法案の草案作りを

手伝った。それはまもなく承認されることになった（COVIDのせいで遅れていたが）。この法案は、最終投票に先立ち、あと1回読会が残っている。この法案は可決されると思う。

この法案には、代理母が21歳以上であること、過去に合併症のない出産経験があることなど、他でも見られる標準的な要件が含まれている。よりユニークな点としては以下のようなものがある：

- 代理出産の支払いはエスクローで保管され、代理母名義の銀行口座に直接振り込まれる。
- 代理出産の支払いには、通常の所得税よりも特別に低い税率が適用される。支払いの前に、税金の未納があればその分は差し引かれる。

宗教指導者たちは、代理母のために金融リテラシーのトレーニングも行うよう要請した。ウガンダではほとんどの人が自分の得意分野で自営業をしている。自分と自分のチームは、Host Mums Ugandaの代理母のために起業家養成コースを作り、ビジネスプランと貯蓄プランの作成を支援することにした。代理出産を終えた後、彼女らはビジネスを拡大するか、ゼロからビジネスを始めるための資金を手にするようになる。パイロットプログラムの卒業生は35人。全員がビジネスの初期段階にあり、うまくいっている。その中には、フードサービス、美容、パーティープランニング、ケーキデコレーション、カフェなどのビジネスが含まれている。ある女性は助産師で、村でバースセンターを開きたいと考えている。

ウガンダでの代理出産の費用は、依頼者が追加で必要とするサービス（胚の輸送など）にもよるが、約60~70,000USドル。これはアメリカでの代理出産の半額以下で、



全ての費用が含まれている（体外受精の費用、代理母への支払い、弁護士費用など）。また、現地で選任された弁護士が代理人として全ての手続きを行う。依頼者が母国に提出する書類が必要な場合も、現地の弁護士がサポートする。

ウガンダでは、独身者（男女を問わず）の代理出産が可能。代理出産の規定では、依頼親の組み合わせは自由だが、ウガンダには反同性愛法があり、ゲイのカップルには不向き。しかし、これらの法律は現在最高裁判所で審議中であり、覆される可能性も高い。ウガンダは近い将来、ゲイやレズビアンのカップルのための潜在的な目的地になるだろうと予測している。

ウガンダでは現在、年間約 1500 件の代理出産が行われていると考えている（国内と外国からの依頼親を合わせて）。自分が話を聞いた多くの体外受精クリニックによると、イギリスからの顧客が多い。ウガンダを拠点とする自分のエージェント、Host Mums Uganda は、2023 年にマッチングと移植を開始したばかりだが、これまでにカナダ、アメリカ、オーストラリア、イギリスから約 25 件のマッチングがある。クライアントの一人はウガンダ国籍だが、現在はイギリスに住んでいる。

**Q. 医療ビザ、代理出産ビザはあるのですか？ 代理母が出産する施設は最新設備ですか？ 代理母が出産施設でハラスメントを受けることはありませんか？**

代理出産を希望する依頼者は、オンラインで申請できる通常の観光ビザでウガンダを訪れる。依頼者は、政府に対して代理出産に関与していることを公表する必要はない。ウガンダ到着後、依頼者に何か問題

が発生した場合は、自分のエージェントが現地でサポートする。

私立の病院とだけ提携している。体外受精の処置、出産前のケア、出産はすべてそこで行われる。ウガンダの不妊治療専門医のほとんどは、英国や米国で訓練を受けた医師だから、医療水準はイギリスとほぼ同じ。

代理母から偏見や嫌がらせの報告はない。病院は代理出産のケースに慣れている。

**Q. ウガンダの治安状況や現地の慣習など、依頼者にとっては心配な面があるのではないのでしょうか？**

依頼親は、安全性、医療の質、代理母について質問することが多い。治安面では、ウガンダはアメリカより平和度が高い。自分のエージェントで働く代理母は、教師、助産師、ビジネスウーマンなど、中産階級の出身で、カンパラに住んでいる。ウガンダでは英語が公用語なので、依頼者と代理母は簡単にコミュニケーションをとることができる。

プログラムにはソーシャルワーカーがおり、代理母の家を毎週訪問する。また、代理母に注射などをする看護師もいる。アメリカよりもフォローアップが厚い。

依頼親は、代理母が最後に子供を出産したのはいつなのか知れたがる。また、代理母のプロフィールに書かれている代理出産のビジネスアイデアにも興味を示す。依頼親は、代理母が自分のキャリア目標を達成する手助けをしていると感じる。これは、多くの場合、つながりのポイントになる。



### Q. ウガンダの体外受精クリニックで受精卵を作りますか？

ウガンダのクリニックは受精卵を作る技術を持っているが、多くの外国人カップルはすでに自国で受精卵を作っているため、受精卵をウガンダまで輸送する。もし受精卵がない場合、依頼者やドナーは、そのプロセスだけのためにウガンダに数週間滞在する必要があり、不便かもしれない。

### Q. ローカルのウガンダ人は、体外受精や代理出産についてどの程度、知識がありますか？ 代理母と子供の間で遺伝的関係がないことを理解していますか？

体外受精に関する知識は人によって異なる。一般論として、ほとんどの人は代理出産とは何かを理解していると思うが、遺伝的つながりという側面についての理解は人によって異なるかもしれない。年配の世代であれば、そのような微妙なニュアンスについてはあまり知らないだろう。若い世代はもっと知っている。

### Q. 現地で、宗教勢力や人権団体などから反対運動が起こる危険性は？

ウガンダではすべての宗教指導者が非常に協力的で、米国とはまったく異なっている。ウガンダは寛容な国であり、人々は宗教全般に対する信念を共有することで結びついている。自分とまったく同じ信念を共有することを望むような態度とは対照的だ。米国では宗教間の寛容さが著しく欠けている。

また、代理出産がウガンダ社会の既存の慣行と一致していることも興味深い。例えば、現地のイスラム文化では、母親が希望する場合、授乳してくれる女性にお金を

払うのが一般的。母親が自分で授乳することにした場合、夫はその犠牲と努力を認めて、妻に贈り物を買うことが期待されている。そのため、代理母にお金を払って子供を身ごもらせることも、同じように捉えられており、「奇妙な」概念とは見なされていない。代理出産は、ウガンダ社会にとって理にかなっている。代理母に対し、利他的であることだけを強要しようとはしていない。サービスに対する支払いがあれば、利他的な活動ではなくなるとも考えていない。子供が生まれるということは、村全体への『贈り物』とみなされる。そのため、代理出産は誰かを助ける行為とみなされ、ウガンダの文化になじんでいる。

人権団体からの反対もない。というのも、この規制は、女性問題を擁護するために選出された女性大臣たちによってもたらされたものだから。ウガンダの文化では、男性は女性の健康について意見を言う権利はない。

### Q. ウガンダ政府の代理出産に対する姿勢は？ 特に、外国人依頼者を受け入れることに対してどんな考えがありますか？ 歓迎されていますか？

代理出産のためにウガンダを訪れる人は何年も前からいる（主にイギリスから）。新しい規制を導入する理由は、代理母になる女性を守るためだが、規制を作る際には、外国からの需要があることを考慮している。代理出産プログラムが閉鎖される最も一般的な理由は、インバウンドの代理出産ツーリズムの影響を考慮していなかったから。

規制が可決されれば、外国人の代理出産希望者が大量に押し寄せるだろうと考えている。ウガンダはその準備ができており、



受け入れることができる。代理母になりたい女性は大勢いる。

#### **Q. ウガンダでローカル女性の卵子ドナーはいますか？白人ドナーを連れて行きますか？**

卵子提供はウガンダで行われており、すべての民族に開かれている。現在、白人の卵子ドナーはあまりいないが、必要であればウガンダに卵子を輸送してくれる卵子バンクがある（例えばギリシャから）。

米国では、アフリカ系の先祖を持つドナーが不足している。ウガンダにはたくさんの卵子があるので、卵子が欲しいアフリカ系アメリカ人には良い選択肢となる。

#### **Q. 代理母への報酬はどのくらい？その金額で、どんなことが実現できますか？**

基本報酬は 15,000US ドル。パッケージはアメリカと同様で、毎月の手当（妊娠による交通費増を補うためなど）、移植代、薬代などがある。これは、都市部で、専門分野で働く学士号取得女性の平均年収と一致する。

#### **Q. これまで大勢の依頼者をサポートしてきて、特に印象深かった場面について詳しく教えてください。**

2020 年にウガンダに行ったとき、女性大臣たちがとても心配していたことのひとつが、代理母の標準的な出産方法が（医学的な必要性の有無にかかわらず）帝王切開であるということだった。女性たちは麻酔で意識を失い、目が覚めた時には妊娠していない状態になっている。そして、赤ちゃんにも依頼親にも会えない。このような女性たちは、結末を欠いていたので、心の整理がつかなかった。

米国では通常、依頼親が分娩室に立ち会い、代理母は子供が生まれたときの依頼親の感動を見ることができる。それは充実した素晴らしい瞬間だ。また、代理母にとっても、この瞬間は大きな喜びになる。代理母が赤ちゃんを手放すことで、「精神的なダメージ」を受けるかもしれないと言う人がいるが、依頼親の幸せそうな姿を見れば、どんな苦悩も吹き飛んでしまうものだ。子供は大切に育てられるとわかっているので、それだけの価値があると感じる。政府はウガンダにこのようなホリスティックな経験をもたらそうとしている。その結果、新しい規則では当事者間の接触は禁止されず、帝王切開は医学的に必要な場合にのみ実施されることになる。

#### **Q. アフリカにはたくさんの国があります。ウガンダ以外に有望な国はどこですか？それらの国についてポテンシャルを教えてください。**

アフリカには他にも代理出産を行っている国があるが、それぞれ異なる。例えば、南アフリカでは完全に利他的であるのに対し、ケニアとナイジェリアでは代理出産は認められているが、現在は全く規制されていない。これらの国の政府代表の中には、ウガンダの規制に興味を示している人もいるので、将来的には他の国でも採用されるかもしれない。

#### **Q. その他**

代理母ハウスは、過去にウガンダで見られた。新しい規則では、医療上の必要性がない限り、女性は自宅で生活することになる。ソーシャルワーカーと看護師による家庭訪問により、定期的な心理評価と生活状況などのチェックが可能になる。



(2024年3月)

### **Ms. Lisa Stark Hughes**

Host Mums Uganda の創設者で、出産までの代理出産の全プロセスをコーディネートし、代理出産と卵子提供に必要な全てのサービスを提供している。

また、米国に本拠を置く GSMoms Center for Reproductive Choice の経営者、そして Society for Ethics in Egg Donation and Surrogacy (SEEDS) の理事でもあり、教育委員長を務めている。

自身も 5 人の子供がおり、米国で 2 度の代理出産を経験している。

### **Host Mums Uganda**

<https://hostmomsuganda.com/>